

神奈川の自然シリーズ 8 三浦の名がついたミウラニシキガイ

田口公則 (学芸員)

先日、三浦市初声でたくさんの貝化石を採集しました。研究者のあいだでは通称「火の見下」とよばれている化石産地です。そこでは二枚貝、巻貝、サンゴなどの化石が見つかりましたが、とりわけホタテガイの仲間のイタヤガイの化石が大量に産出しました。その化石は“ミウラニシキガイ”という三浦の地名が名前についた貝化石です。この産地の地層は三浦層群初声層とよばれ、今からおよそ600～400万年前の新生代中新世末期～鮮新世前期の時代に堆積したものではないかと考えられています。県内では初声層以外に、逗子の田越川砂礫岩層、大磯海岸の大磯層、宮ヶ瀬の落合礫岩層、愛川町の中津層などからもミウラニシキガイの産出が知られています。その中で、ここ初声ではとくにミウラニシキガイばかりが多く密集して見つかっています。

化石も含めて生物の新種をみつけたときは新しい名前(学名)をつけますが、一般にその種の特徴を表した語彙や地名、人名などをあてたりします。1920年に東京大学の横山又



整備された三浦市初声「火の見下」。



県天然記念物・鏡摺の不整合露頭。

次郎教授が三浦半島の逗子市の鏡摺からみつかったイタヤガイの化石に *Chlamys miurensis* という学名をあたえ、ミウラニシキガイとなったのです。現在、この最初に記載されたミウラニシキの産地である鏡摺の切り通しでは、地質学的、古生物学的に重要な「鏡摺の不整合」の崖が神奈川県天然記念物として保存されています。

今回の三浦市初声での採集では、地元の方々の多大な貢献がありました。最近の大きな発掘のきっかけがそうであるように、初声の場合も改修整備工事が行われたことでたくさんの化石が出てきました。普通なら化石はそのままの石ころとして処分されてしまうのですが、「もしかしたら貴重な化石なのでは」と感じた近所の方々が保存のよい化石を採集されていたのです。そのおかげで後から私たちが採集したミウラニシキガイの破片の化石にくわえて、工事中にしか採集することのできないような保存のよい化石、たとえばイタヤガイの仲間では分類の基準となる重要な耳の部分(ホタテガイなどのちょうつがいのところ)がきちんと残っている状態の化石を得ることができました。ここの化石産地は研究者のあいだでは昔から有名どころだったのですが、そこが工事によって削られていることまではすぐに知られませんでした。日頃から観察することのできる地元の方でない気が付かなかったところでした。

冒頭にお話ししたように、三浦市初声ではミウラニシキガイばかりが大量に見つかりました。どうしてミウラニシキガイばかりなのでしょう?。現在の海では、同じ仲間のイタヤガイが何年かに一度、大量発生することが知られています。海流の流れによってイタヤガイの子供が集積し、さらにその場所の底質条件がよいときに大量発生するのだそうで



三浦市初声から産出したミウラニシキガイ。

す。同じようなことが初声のミウラニシキガイにもおこったのでしょうか。そのミウラニシキガイは、新生代鮮新世に絶滅してしまいましたが、ミウラニシキガイといっしょに逗子の名がついたモクハチミノガイ (*Lima zushiensis*)が見つかることがあります。現在もこのモクハチミノガイは相模湾に生息しています。なぜミウラニシキガイは絶滅しモクハチミノガイは生きのびることができたのでしょうか。まだまだわからないことばかりです。

三浦市初声の産地は整備工事によって無くなってしまいました。しかし、地元の方の協力によって博物館にたくさんの資料を残すことができました。もしかしたら将来、この資料によってミウラニシキガイのなぞが解き明かされるかもしれません。そう思うとミウラニシキガイの破片でも貴重に思えてきました。いま博物館の採集箱の中には、たくさんのミウラニシキガイが集められました。つぎはこれを貴重な遺産とすべくきちんと標本資料として残していく作業をしなければなりません。ミウラニシキのなぞを考えながらみなさんと徐々に整理していきたいと思っています。

\* 工事現場での化石採集は必ず工事関係者の許可を得ることは当然のことです。化石採集の意味を理解していただくためにも最小限のマナーを心掛けるようにしたいものです。